

母が帰宅した。食卓の椅子に座り込み、夜勤明けで疲れたと口にする母。実際ぐったりとして濃い疲労感がにじみ出ている。その疲労をもたらせた本当の理由をぼくは知っている。母の香水がいつもより強かった。その理由も哀しいことに知っている。母の顔をまともに見ることができない。母もまた、ぼくと視線を合わせようとしない。まだ、母の身体は性交の汚れをその衣服の下に隠しているのだ。母の美しい顔を見る。清楚な透明感のある美しさをもった母は、もういない。口紅をひいたその口にペニスを咥えていたんだ。そう思うと、今までの清楚な母として見るができなかった。一人の女として見ている自分がいた。

母は投稿掲示板で公開された通りのミニスカートを穿いていた。裾の極端な短さを気にする母。母がミニスカートを穿くようになったのは、今から思うと隆志と関係をもつてからだ。隆志の要求だったのだ。ぼくは母がミニスカートを穿いたはじめての日、母の輝かんばかりの瑞々しい下半身の曲線美に見惚れた。若々しい母にはお似合いだった。

スタイルのよさが引き立つとほめた記憶がある。母はそれから毎日ミニスカートをはいた。ぼくが褒めたことで、母はぼくのために穿くようになったと思いこんでいた。しかしそれは違っていた。母は、衣服までも隆志に指定され、それを忠実に実行していたのだ。隆志の命令でミニスカートを穿いていたのだ。羞恥心にさいなまれながらぼくの前で穿いていたのだと今さらながら気づかされた。

もう一つそれまでの母が身につけなかったアクセサリがあった。チョーカーだった。母の細い首をさらにひきたたせるアクセサリとしてぼくの目には映っていた。ミニスカートと同様にぼくは母の首から胸元にかけの美しさを引き立たせるチョーカーを褒めた。そのチョーカーを母は常時付けていた。それもぼくは勘違いをしていた。けっしておしゃれ感覚で母はつけていたのではないのだ。隆志が母を支配した証につけさせていたのだと今でははっきりとわかる。画像で見た母の首に装着させられていた犬の首輪の代用品なのだ。母はぼくの前で友人の所有物になった証

を身に付けて生活することに羞恥していたのだろう。今なら母が入浴するとき以外は常時つけていた理由が痛いほどわかる。はじめて見たチョーカーに違和感を感じたその理由もわかる。痛々しいほどに母の首に食い込んでいたのだ。母の生活そのものも束縛しているという隆志の母に対する宣言だったのだ。